

作品梗概集 3

- 1.ここに掲載した各梗概は、十七世紀フランス演劇研究会での発表をまとめたものである。
- 2.各々の梗概の執筆は、研究会での発表者が担当した。
- 3.掲載の順序は、原則として、担当者の意図を尊重し、担当者別にまとめ、その中では初演年代順とした。
- 4.初演年代は、原則としてデイエルコウフ=オルスポエルに拠ったが、他の研究者の推定に基づく場合はその研究者の名前を年代の後に付した。
- 5.読者の便宜を考慮して、作品梗概集の後に索引を付した。

Rotrou : *Crisante*

ジャンル 四幕韻文悲劇
初演 1635年(ランカスター)
出版 1640年
主な出典 プルタルコス『烈婦伝』

これは当時としては例外的な、四幕の悲劇である。オリジナルは五幕だったが、観客の退屈を恐れた作者が冗長な部分を削りに削った結果、四幕という構成をとらざるを得なくなったようだ。bienséanceに反し(強姦、舞台上での殺人と自殺、切られた首など)、三単一の法則も守られていないが、これは30年代の悲劇としては特に例外的ではない。アンティオシュには王としての威厳がなく、クリザントの性格もやや単調だが、カシーの心理描写には緊迫感があり、かつ繊細ですらある。全体的特徴としては暗いが力強く、スペクタクル性も盛り込まれていて(コリントの廃墟、葬儀の黒幕が張り巡らされた王の居室、など)、観客の興味を最後まで保たせたであろう。

〔第一幕〕ローマの将軍マニリー Manilie はコリントを征服したところである。この地の王アンティオシュ Antioche は女王クリザント Crisante を敵の手に残して姿をくらました。女王は魅惑的な美女だ。征服者を征服してしまう目の持ち主。だが身代金を受け取って身柄を引き渡すまで、ローマの栄光にかけて彼女を保護し名誉を守らねばならない。マニリーは百人隊長カシー Cassie に後事を託して他の任務地に発つ。ところがカシーは女王を一目見た時から官能的情熱を抑えかねていた。一度だけでもいい、あのひとを抱きたい、と。側近は、ローマ市民としての義務と名誉を喚起してこの邪恋を諦めさせようとするが、カシーの耳には入らない。彼はクリザントに会い、同情心にあふれる言葉をかけながら、次第に彼女の美を誉め讃える口説き文句に移ってゆく。女王はそれに気づき、誇りを傷つけられて怒りとともに席を立つ。が、カシーは諦めるつもりはない。

〔第二幕〕コリントからかなり離れたアンティオシュの隠れ家。ローマの専横を呪う王。だがあ

の圧政では長くは保つまい。気がかりなのは女王のこと... 一方コリントでは、カシーがいよいよ思いをつのらせていた。腹心のオラント Orante は必死に諫めるが、力ずくだろうと恋心からだろうと、女王の接吻は俺の義務より価値がある、とカシーの決意は固い。彼はオラントに彼女の説得を命じる。自由と引き換えに身を任せよ、と。不承々々出向いたオラントは、実に拙劣な説得の仕方と女王の激しい怒りを買って、彼女が懐に隠し持っていた短剣で刺し殺されてしまった。クリザントは自分も死のうとしたが、首尾はいかにとやって来たカシーに武器を取り上げられる。女王の貞操観念の堅固さと誇り高さに感じ入った彼は、恋を諦める、あなたに死なれるよりは辛くはない、と告げる。クリザントは安堵し、自室にひきとる。しかしそれはカシーの戦略だった。油断している今がチャンス、義務や道徳など踏みじろう、あの美しい獲物を恋の祭壇に捧げるのだ。彼は彼女の部屋の扉まで行く。だが立ち止まる。自分は何をしようとしているのか、自身と先祖の名譽を一瞬の快楽のために犠牲にするのか、理性よ、甦れ。彼は踵を返す。が、また立ち止まる。いや、恋の神にのみ従おう、恋の罪は罪ではない、理性よ眠れ。彼は引き返し、扉を開ける。

〔第三幕〕コリント郊外。クリザントは操を奪われ、釈放された。彼女は王に会って全てを打ち明けつもりである。自殺の衝動に駆られるが、カシーを殺すまでは死ねない。コリントでは、カシーが激しい後悔の念に苛まれている。女王を犯し、身代金を取らずに釈放したばかりでなく、衛兵をふたり死なせるという不始末をしてしまった。二人の衛兵は、カシーが与えた女王の侍女を奪い合い、殺し合ったのだ。表面は偽って隠しおおせるが、良心の呵責は抹殺できないだろう。場面は変わってアンティオシュの隠れ家。運命の悲惨を嘆く王のところへ女王が戻って来た。だが喜びも束の間、彼女の率直な告白を王は受け入れることができず、残り物の色香を欲しがると男を捜しに行くがいい、と退けるのだった。場面は再びコリント。任務地から帰還したマニリーに、王の隠れ家から舞い戻ったクリザントが、カシーの暴虐を訴える。將軍は“ローマの恥”カシーを連行させる。カシーには既に覚悟ができていた。強い改俊の情と死を願う姿を見て、人々は心動かされ助命を乞うが、將軍は彼を女王の裁きに委ねる。クリザントは死を命じて剣を与えた。カシーはそれで胸を刺し、息絶える。彼女はさらに復讐の完遂の印として、カシーの首を要求する。

〔第四幕〕アンティオシュの隠れ家。葬儀用の黒幕が張り巡らされた一室。寝台の傍らで不運をかこち、妻の裏切りを嘆く王。臣下が慰め力づけるが、王は立ち直る氣力をすっかり失っている。そこに再びクリザントが戻って来た。見なさい、王よ、私がどんな風に愛人を愛撫したか——カシーの首が王の足元に投げ出された。そして彼女は剣を取り出すやいなや我と我が身を突き刺した。誇り高い王女は怒りのうちに死んだ。王は妻の心の純潔を知り自分の軽率さを責めるが、今となっては如何ともし難い。彼はしばしの休息を求め、臣下を避けて寝台の帳の中に籠もる。が、再び現れた時には、剣を胸に刺していた。血塗られた剣を引き抜いた王はクリザントの死体に重なって倒れ、ローマを呪って息絶えた。残された臣下たちはこの惨状にただ茫然とするばかりである。 (鈴木)

Rotrou : *Antigone*

ジャンル	五幕韻文悲劇
初演	1637年(ランカスター)、オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版	1639年
主な出典	ソフォクレス『アンチゴネー』 エウリピデス『フェニキアの女たち』

この作品はラシーヌの処女作『ラ・テバイード』(*La Thébaine*, 1664)の序文の中で、二つの異なった筋(敵対する兄弟の筋とアンティゴヌの悲劇的英雄行為の筋)があることで批判されている。観客の一貫した興味の流れを分断してしまう、というのだ。確かにタイトル・ロールの王女は最初の二幕ではほとんど重要な役回りを与えられていない。これは別の物語だ。だが作者はテーマとしてはアンティゴヌを選んだが、それに先立つ“敵対する双子の兄弟”のテーマを捨てきれなかったのであろう。というのはこれこそロトルー(および他のバロック劇作家)が偏愛する対照語法と矛盾撞着語法が活躍するのにうってつけの“場”なのだから。大作家ラシーヌにけなされることでこの『アンティゴヌ』は小さな名を残すことになったが、ランカスターの見解では、登場人物の明確な性格づけとドラマティックな場面(髪をふり乱してのジョカストの登場、アンティゴヌとアルジーの深夜の出会い、アンティゴヌの死体を抱いて自害するエモン)において、充分ラシーヌの処女作を凌駕する、ということになる。実際、かなりの成功を収めた。

〔第一幕〕テーバイの王宮。夜明け。重苦しい眠りから覚めたジョカスト Jocaste は錯乱の一步手前である。息子であり夫であった前王エディップとの間にできた双子の兄弟、エテオクル Etéocle とポリニス Polynice が、今しも王座をめぐる互いの血を流そうとしているのだ。そこに娘のアンティゴヌ Antigone から一時休戦の報告が入る。叔父クレオン Créon の息子メネセ Ménécée が我が身を犠牲にして停戦を呼び掛けたのだ。現在の王であるエテオクルは、交互に王位につくという最初の取り決めを反故にした理由としてポリニスの暴君的性質を指摘し、引き続き自分が統治することの正当性を主張する。クレオンは息子を失った個人的怒りに身をまかせている。このような状況ではアンティゴヌと、クレオンのいまひとりの息子エモン Hémon との恋の未来は暗い。悲観する恋人たち。一方城外のポリニスの陣営では、妻アルジー Argie と義父アドラスト Adraste が無益で残酷な戦いをやめるようポリニスを説得するが、聞き入れられない。

〔第二幕〕城壁の下、敵対する兄弟は相まみえる。アンティゴヌの説得は無視される。ジョカストが現れ、諸悪の元凶は自分にある、と身を投げ出して息子たちの武装放棄をせまる。兄弟は一旦は和解するかに見える。が、エテオクルには王座を譲る意志は毛頭なく、ジョカストですらエテオクルが人民の心をつかんでいることを理由に、他国で王座を得ることをポリニスにすすめる。ポリニスは、王の資格は民に愛されることにはなく、畏怖されることにある、と逆襲。ふたりはあらためて両陣営の前で決着をつけようと約束する。母親の絶望と怒り。

〔第三幕〕運命を呪って自殺したジョカストを悼むアンティゴヌ。エモンがエテオクルとポリニスの死を伝える。ふたりは相打ちだった。続いてアンティゴヌの妹イスメヌ *Ismène* が、クレオンの即位と、反逆者ポリニスの遺体の埋葬を禁ずる公示が發布されたことを知らせに来る。アンティゴヌは兄の死を悲しみ、“神々の法”を遵守するために命をかけて遺体を葬る決意をするが、イスメヌには“国の法”を犯す勇氣はない。場面は変わって城外。決闘が行われた広場。アルジーが闇にまぎれて夫の遺体を埋葬しに現れ、同じ目的でやって来たアンティゴヌと出会う。同じ男を愛したふたりは出会いを喜び、協力して遺体を捜す。

〔第四幕〕漁夫の利のようにして王座についたクレオンだが、息子をひとり犠牲にしたのだからこれも当然、と満足である。だが公示をめぐるふたりの臣下の間で意見が分かれる。祖国を襲った男は狼の腹におさまって当たり前とするクレオダマス *Cléodamas* と、それは非人間的行為だと非難するエフィーズ *Ephise* である。クレオンは後者を怒りのもとに退ける。そこに掟を破った者の逮捕が告げられ、アンティゴヌがアルジーとともに王の前にひきすえられる。身内の裏切りに蒼白となる王。だが彼女はたじろがずに“神々の法”を説き、誰であれ死者を埋葬する行為が正義に適っていることを述べる。アルジーは埋葬のためのわずかな土地も惜しむのかと罵り、イスメヌは自分も共犯であると主張し始める。エフィーズはアンティゴヌを弁護し、エモンは民の声はむしろ彼女を賞賛している、意見を変えることは理性が命じる時には恥ではない、と父に詰め寄る。クレオンは怒り心頭に発する。臣下、息子、その妻になるはずの女、姪——新王である自分をもりたててしかるべき人間たちがことごとく反抗しようとしているのだ。

〔第五幕〕アンティゴヌの判決は餓死による死刑と決まった。エモンは煩悶し、彼女を幽閉場所の洞窟から脱出させようと決意する。一方エフィーズがなおもクレオンの心を軟化させようと空しく試みているところに、クレオダマスが盲目の予言者ティレジー *Tyrésie* を伴って来る。予言者は今朝の鳥占いから凶兆を読み取り、それを“自然の法”を覆したクレオンのせいだと非難する。自衛できない死者に辱めを与えた、神々に許しを乞え、と。王はどうせ誰かに買収されたに違いない、と彼を侮辱するが、一族の悲惨な末路を予言されて次第に恐怖にかられる。ついに王は、未亡人と妹たちの立ち会いのもとにポリニスの遺体を手厚く葬ることを命令。だが遅かった。アンティゴヌ自刃の報が入ったのだ。彼らは城外に駆けつける。恋人の遺骸を抱いた半狂乱のエモンは父を呪い、テーバイ王家を呪って皆の前で自害する。あまりの光景にクレオンは失神。残された者たちは運命の酷さを嘆く。

(鈴木)

Rotrou : *Iphigénie*

ジャンル 五幕韻文悲劇
初演 1640年(ランカスター)、オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版 1641年
主な出典 エウリピデス『アウリスのイピゲネイア』

前作の悲劇『アンティゴヌ』の成功に気をよくした作者が、同じギリシア悲劇物で二匹目のどじょうを狙ったのではないかと憶測されうる作品。ユリスを付け加えた他は『アウリスのイピゲネイア』の筋にほぼ忠実である(ただしユリスはたいした機能を果たしていない。むしろ無駄である)。が、アガメムノンの性格は原典より優柔不断に、メネラスはより狡猾に描かれている。つまりどちらよりも人間らしくなっている。特に幕開きのアガメムノンの翻意に翻意を重ねる長い葛藤は、父親の苦悩を表してかなりリアスティックな効果がある。また当然のことながら観客の目を奪う見せ場(たくさんの派手な武器を振り回すアシール、イフィジェニーの天への消滅、雲間からの女神の登場)も用意されているが、『アンティゴヌ』ほどは成功しなかったようだ。

〔第一幕〕ヘレネの奪還を目指してトロイアに攻め入ろうとしているギリシア軍は、ここアウリスの浜で長い凧のため足止めをくっている。そして今は真夜中。総大将アガメムノン Agamemnon の天幕。彼は苦悶している。一通の手紙を届けさすべきか否か。予言者カルカス Calchas の宣告はむごい。船が出帆できるだけの風を吹かせるには、娘イフィジェニー Iphigénie の血をディアーヌ Diane の祭壇に捧げねばならぬ、とは! 総大将としての責任を果たすため、彼は既にアシール Achille との婚礼の儀式を執り行うと偽って、娘とその母をこの地に呼びつける手紙をやってしまっていたのだ。この二通目の手紙はそれを取り消すためのものだ。だが娘が来なければ名誉は失う。いや、自分は人間性を失うまい。葛藤の末、アガメムノンは手紙をアマントス Amyntas の手に託す。夜が明けていた。

〔第二幕〕だがかねてより兄の挙動に不信感を抱いていたメネラス Ménélas が、アマントスの行く手を阻んだ。何事か、とアガメムノンが現れる。兄弟はトロイア戦の是非をめぐって論争する。総大将の義務と名誉の放棄を非難する弟。兄の方はなぜ弟の妻の不倫のために娘を犠牲にしなければならぬのか、と反論。そこに使者の報告が入る。今夜にもクリテムネストル Clytemnestre とイフィジェニーが到着する、と。万事休すである。メネラスにたきつけられたユリス Ulysse の雄弁にも押されて、総大将は腹を決める——娘を捧げよう、だが母親には一切さとらせてはならぬ。

〔第三幕〕娘と妻に直面するアガメムノン。苦痛をこらえているが、娘の無垢な顔を見るとあふれる涙をおしとどめることができない。彼は娘をおいて国に帰るよう妻に言うが、婚礼に立ち会うのを楽しみにしていたクリテムネストルは承知しない。夫の態度をいぶかしく思った彼女は娘の婚約者アシールに会う。だが彼は婚礼など初耳である。不信感をつのらせる彼女に、来合わせたアマントスは全てを知らせてしまう。逆上するクリテムネストルに対して、アシールは同情と自分の名を口実に使われた怒りから助力を誓う。

〔第四幕〕イフィジェニーも秘密を知った。クリテムネストルは激しく夫を攻撃する。誰にも純潔な娘の血を流す権利はない、まして義弟のいかがわしい欲望を満足させ、あの淫乱女を甘やかすために処女を犠牲にするなど野蛮の極致だ、と。だがイフィジェニーは自分の身分が自分に犠牲を強いていることを知っており、メネラスとその家族が問題なのではない、天と全ギリシアが問題なのだ、という父の言葉を受け入れる。取り乱したクリテムネストルは納得せず、呪いの言葉を浴び

せて夫を追いやる。そこにアシール。数々の武器を身に着け、たったひとりで全ギリシア軍を敵に回すつもりである。美しいイフィジェニーを一目見て恋に落ち、戦闘意欲を高める。しかしイフィジェニーは運命の裁きに従うこと、自分の犠牲は名誉ある行為であることを説く。彼女の雄々しい心に敬意を抱いた彼は、ともかくいつでも彼女を救えるよう祭壇に剣を携えてゆく、と譲歩する。母の悲痛な混乱。

〔第五幕〕ディアヌの祭壇がある森の中。メネラスが突然、自分の利益は捨てる、生贄の儀式を取りやめようと言い出す。叔父や弟としての目で姪の不幸と兄の苦しみを見られるようになったからだ、と。だが非情な司祭カルカスはあくまで儀式の遂行を主張、指導者たちの感傷を非難し、天罰を言いたてる。イフィジェニーが連れて来られる。アガ멤ノンには娘に言うべき言葉が見つからない。そこにアシールが乱入し、命をかけて王女を守る決意を高らかに述べる。ユリスは巧みな弁舌でこの半神を説き伏せようとするが叶わず、イフィジェニーが静かに説得する。さて、言葉はつくされた。カルカスはイフィジェニーの前に出、刀を取る。それをまさに打ち下ろそうとした瞬間、天空がにわかにかき曇り、稲妻が走り、恐ろしい雷が轟いて、皆が我にかえった時、既に娘は天に連れ去られていた。やがて光が射し、天が開く。ディアヌが雲間に現れた。女神は勇気ある高潔なイフィジェニーを痛ましく思い、女司祭として自分がもらいうけタウリスの岸边においたと告げてから、姿を消す。皆は女神の恩寵に感謝し、いざトロイアへと心ははやる。 (鈴木)

Thomas Corneille: *La mort de l'empereur Commode*

ジャンル 五幕韻文悲劇
初演 1657年後半(ランカスター)、マレー座(ドゥ・ヴィゼによる)
出版 1659年
主な出典 Cassuys Dio または Coeffeteau によるローマ史

三作目の悲劇作品。一作目『ティモクラト』の成功に自信を得る一方、複雑すぎて不評だった二作目『ベレニス』に代りもっと兄コルネーユに近い悲劇を書こうとした作品である。コモド Commode については同性愛者、絞殺を変更したことを除き性格は史実に従っている。エルヴィ Helvie は創作上の人物である。三単一は守られている。二人の女性を交互に結婚相手に選ぶ設定は『アンドロマック』を思わせ、ランカスターはラシーヌが当然この作品を参考にしたとしている。

〔第一幕〕マルシア Marcia はローマ皇帝コモドとの結婚を受諾。妹エルヴィは皇帝の残忍さ、道徳の低さを理由に反対。マルシアは何よりも皇帝の地位に惹かれている。そして皇帝はエルヴィの恋人レチウス Lætus を彼の妹と結婚させようと計画している。エルヴィはレチウスに皇帝の提案を受け入れるよう説得するが彼は拒否。エレクチュス Électus は皇帝の行状を諫め、マルシアとの結婚を積極的に勧める。エレクチュスの心中をまだ知らぬレチウスはエルヴィと自分の悩みを打ち明ける。エレクチュスは協力を約束する。

〔第二幕〕 マルシアはエレクチュスを愛し、敬っている。しかし彼女は皇帝の地位に強く執着。一方エレクチュスはマルシアの野心を知りつつも犠牲的な愛を告白。レチュスはエレクチュスのマルシアへの愛を知る。皇帝は結婚の祝宴の準備を命じる。レチュスは王女との結婚を辞退するが受け入れられない。皇帝は漸くマルシアとの結婚を決めたが、なんとエルヴィが彼の意中の人であるという。そしてレチュスに彼女を説得するよう頼む。彼はあまりのことに驚き、人の心を思いのままに縛る、それこそ暴君であると嘆く。エルヴィは拒絶、血を流す覚悟である。

〔第三幕〕 近衛長フラヴィアン Flavian の説得にもエルヴィは暴君には従わないと拒絶。コモド帝自ら説得。初めは居丈高に恩着せがましく、次に服従を命じるが、エルヴィは生まれを誇り、マルシアを思いやり、差し出された王冠にも愛情にも動かされず、皇位に敬意は捧げても暴君には命を賭ける、と拒絶。フラヴィアンは彼女に皇帝から彼女の父を殺すように命じられていると告げる。エルヴィは義務か情か、どちらを選ぶか悩み妥協する。それを知りマルシアは嫉妬と復讐に燃え、エレクチュスに皇帝殺害を命じる。彼は義務と愛に挟まれて苦悩する。

〔第四幕〕 皇帝はエルヴィを待っている。彼は彼女の抵抗の激しさを憎み、身の危険を感じつつも、彼女への激しい恋情を消すことが出来ない。彼はエルヴィに自分を殺そうとしていると彼女の意図を言いあて、自分の愛にに従うように云う。彼女は敗北を認めるが、それは自分の無力に対しであり、彼に従ったのではない、彼が皇帝に相応しくないと激しく非難。皇帝は結婚すればもっと容易く彼女の意図を達成出来るというのが彼女は結婚の神聖を侵すことは出来ないという。皇帝はレチュスを疑い、エルヴィを愛しているか詰問する。彼はエルヴィを庇い、皇帝襲撃は自分が考えたこと、彼女は自分を庇って実行しようとしただけといえば、エルヴィは彼の愛を思って死ぬのは何でもない恋人を庇い、レチュスは自分だけを罰するようと皇帝に迫る。コモドは自分の血が愛を確かめるのにそれ程必要ならこの胸を突けという。するとマルシアが皇帝のために自分が血で贖うと申し出る。皇帝はレチュスの愛情を知り、呪いながらも自分の誤りを認める。そしてマルシアに心変わりを詫び、エルヴィを諦め、彼女に新たに結婚を明日に約束する。マルシアは手放しに喜ぶ。レチュスとエルヴィは不安におののく。エレクチュスはマルシアに皇帝はエルヴィとレチュスを呪い、怒りに任せてあなたとの婚礼の準備を命じた、身に危険が迫っている、逃げるように、と勧める。マルシアは彼のお陰で自分の運命が狂ったと非難、皇帝に忠誠であることを強要する。

〔第五幕〕 エレクチュス、姉妹の父ペルティナックス Pertinax、エルヴィ、元老院の半数、マルシアの殺害を今晚計画している皇帝の手紙にマルシアは驚く。フラヴィンが密かにこの計画を教えてくれたのだ。レチュスは皇帝を倒す理由が出来、結束したという。皇帝は何の疑いもなくエレクチュスの差し出す毒を飲んだという報告。それは効き目が遅い。エレクチュスはこの懲罰は正しいが主人を殺すことに悔恨の情を感じず。しかしマルシアの命が危ないことを知って決心した。現われた皇帝とマルシアはこれまでの経緯を互いに許し合う。毒が効き始める。マルシアは彼の手になる殺害命令書を見せ、エレクチュスが自分が与えた毒を盛ったと云う。彼はフラヴィンの裏切りを知り、神々を呪う。エレクチュスは宮廷の混乱を鎮めに出ていく。エルヴィは皇帝の瀕死の状態を知り、父の安全のために安堵。高潔な父はコモド帝の父から受けた恩を忘れず、この謀反には加わ

っていない。コモド帝の所業は彼の地位によるのではなく、彼の血筋の為させる業とマルシアは説明。皇帝の最期の様子が伝えられる。彼は神を呪い、自ら短剣で突いたのだ。エルヴィは独裁者の終焉を喜ぶ。マルシアはフラヴィンの功績を讃える。民衆の歓喜の声。独裁者の死に対して、そして新たに選ばれた皇帝に対して。マルシアはそれがレチウスではないかと心配するが、父と知り安堵する。独裁者からローマが解放された喜び。(千石)

Thomas Corneille: *Persé et Démétrius*

ジャンル 五幕韻文悲劇
初演 1662年、オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版 1665年
主な出典 リヴィー (XXXIX およびXL巻)

主な出来事、人物などリヴィーにかなり負うが、デメトリウスの死はペルセによる殺人から自殺に変更。*Cinna*、*Pompée*、*Nicomède*と類似する箇所があるため M・レニエにコルネーユ的作品と分類されている。兄弟の反目、腹黒い従者と寵臣、背景として政治の混乱を外的劇要素として、それに父の苦しみ、プレシューな恋を絡ませているが、公(政治)と私(恋愛)の葛藤に根本的に欠け、死は単なる失恋の結果に終わっている。ランカスターはヒロインの扱い、セチメンタルな自殺、歴史背景の使い方の不味さを欠陥としてあげ、憐憫が作者の目的とする感情であるという。ドビニャック師は失敗作とみなしている。興行的には殆ど成功していない。劇作法は守られている。

【第一幕】マケドニアの王子ペルセ *Persée* と弟デメトリウス *Démétrius* は王位を狙い反目している。昨日も二人は熾烈な争いをし、ペルセは危うく毒殺されそうになったという。彼は父王に訴えるため、父の寵臣ディダス *Didas* にその仲介を頼むが、彼は慎重である。ペルセにとって悔しいのは婚約者エリクセーヌ *Érixene* がデメトリウスを愛していることだ。彼の腹心オノマスト *Onomaste* は次のような策略を提案する。1. 民衆とローマに支持されているデメトリウスの謀叛をほめかし、ディダスに恐怖を与え、仲介を引き受けさせる。彼は奴隷上がりでローマから疑われているからだ。2. 王がローマを探らせるために送った使者にローマ帝の偽の手紙を渡し、王にデメトリウスを疑わせる。3. ディダスとデメトリウスを反目させるために王にデメトリウスとディダスの娘の結婚を計画させる。当然彼はこの不釣り合いな婚姻を断わるからだ。断らなければ誇り高いエリクセーヌはペルセのものになり、いずれにしても損はない。ペルセは諂い、ほめかし、脅しによってエリクセーヌを愛させようとする。彼女の侍女は妥協を勧め、デメトリウスもまた王位への野心を持ち、純粋な愛情だけでないと指摘するが彼女はペルセには卑劣な心が見えると反論する。彼女はデメトリウスに命を守るためにこの国を離れるよう懇願。

【第二幕】王は父としてデメトリウスの振る舞いに寛大な判断を示すが、兄弟に弁明の場を与える。ペルセは兄である権利、デメトリウスがローマに気に入られ、それをかさに、謀叛を計画、自

分を殺そうとしたと述べる。デメトリウスは王位へ野心のあることは認めるが、前日の事件はでっち上げ、ペルセが人気のある自分を嫉妬している為に両者に争いが生じていると反論。王はデメトリウスにローマと共謀してない証拠にディダスの娘と結婚することを命じる。デメトリウスはディダスにこの結婚を王に断るよう頼む。

〔第三幕〕王は兄弟が仲直りをし、結婚によりローマとのあいだの疑いも解けたと告げる。気位の高いエリクセーヌはデメトリウスの心変わりを内心嘆きながらも、王の決定に異存はないと答える。ディダスは娘とデメトリウスとの結婚を身分が違い過ぎることを理由に断りにくる。驚く王に、デメトリウスはローマと密かに結託し王になる野心を持っている、それに少しでも加担していると思われたくないからだと説明する。エリクセーヌは王に従いペルセと結婚するのは、他の女性との結婚に同意した裏切りへの復讐の為という。一方デメトリウスは彼女がペルセと結婚することを責め、ディダスを自分の気持ちを知っている証人とするが、反対に彼の裏切りを知る。エリクセーヌの和らぐことのない怒りに絶望する。

〔第四幕〕エリクセーヌはデメトリウスの前でペルセに恭順の意を述べる。デメトリウスは恋人を返してくれるよう頼むがペルセは断る。エリクセーヌを返してくれるよう王に懇願、次に彼の激しい性格はディダスの卑劣さを告発し、その娘との結婚は不名誉であると訴え、最後に自分を亡きものにしよう、その時ディダスも道連れにすると云う。ディダスは彼がローマと通じていると巧みに王を挑発、王はためらいながらもデメトリウスの逮捕、毒殺を決心。王はこの決定をローマに対する当然の処置と自らを納得させつつも、強い後悔にさいなまれる。息子の処遇を腹心アンティゴヌスに告げ、その根拠となったローマ帝の手紙——マケドニアとトラキア支配を認める——みせる。彼は減刑、追放を提案。王はそれを受け入れる。

〔第五幕〕婚礼の準備完了に、戸惑いを隠せないエリクセーヌにローマ帝の手紙はペルセの指示による偽物で、毒殺寸前のデメトリウスは救われた、とアンティゴヌスが報告。迎えに来たペルセに、彼の策略をほのめかし、釈明を求めるが彼は居直る。状況変化の説明を求めるペルセに、王は彼の策略を公表、デメトリウスの無実を認める。エリクセーヌにはトラキアの王位返還を約束する。ペルセはデメトリウスに王位を譲る代わりにエリクセーヌを取り上げないでくれ、と懇願する。デメトリウスの自殺の知らせ。彼は愛する者を失って生きる意味がなくなったのだ。勝ち誇るペルセ。父王の悔恨。エリクセーヌの悔恨と復讐の誓い。デメトリウスの死を知った民衆の怒りとディダスの自殺。王はペルセの行く末と、自らの、苦しみによる死を予測する。 (千石)

Lully et Quinault : *Cadmus et Hermione*

ジャンル 音楽悲劇(Tragédie lyrique)、プロローグ付五幕
初演 1673年2月1日 国立音楽アカデミー(Spire Pitou “The Paris Opéra”)
出版 1673年
出典 プロローグはオヴィデウス『変身物語』第一章と第八章

キノーの最初の音楽悲劇(初演当時は *Tragédie en musique* と名づけられていた)である。ペ＝レー
ル掌球場で初演され、成功、特に第二幕のカドミュスとエルミオーヌの別れの場面が好評を博した。
ルイ 14 世はこの台本を気に入り、キノーに 2,000 リーヴルの手当てを与えた。この成功に気を良くし
たリュリは、年 4000 リーヴルの報酬で台本作者としてキノーと契約を結んだ。一般的にプロローグ
は国王への讃歌であるが、この作品では比較的劇的に構成されている。1673 年当時は第三次オラン
ダ・イギリス戦争の最中であり、勝利への願いがこめられている。エルミオーヌは *Mlle Bigogne*、シ
ャリテは *Mlle Chartilly*、カドミュスは *Beaumavielle* が、プロローグの「妬み」と太陽神は *Clédère* と
Miracle が交互に演じた。バレエの振り付けは *Beauchamps* が担当し、*L'Etang* がこのオペラのバレエ
でデビューした。また再演では、*Pécourt* がデビューしている。再演は、パレ・ロワイヤル座で 1674、
1678、1679、1690、1691、1703 年に行われている。

〔プロローグ〕(副題「大蛇ピトン」)(舞台は田園、両側に村の群落、舞台正面奥は沼、空に曙、
やがて太陽が地平線から上がる)妖精と羊飼いたちの太陽神の祭り。突然恐ろしい物音と共に暗闇。
舞台中央奥の洞窟から「ねたみ」が飛び出す。「ねたみ」は沼から大蛇ピトンを呼び出す。「ねた
み」が、太陽神への挑戦の言葉を口にすると、光線が闇を貫き、ピトンを照らし、傷ついたピトン
は沼に落ちる。光りの雨が舞台に降る。「ねたみ」は、四人の「風」とともに奈落に沈む。太陽神
が馬車に乗って空に昇り、人々は歌い踊る。

〔第一幕〕(ギリシャの *Aonie* と呼ばれる地方、庭園)カドミュス *Cadmus* は、この国の王である巨
人の許嫁エルミオーヌ *Hermione* に恋している。人々が諫めるが、カドミュスは聞かない。そこへエ
ルミオーヌが、許嫁の巨人を嫌って逃げてくる。エルミオーヌを追いかけた四人の部下の巨人
がアフリカ人とともに踊りを踊る。エルミオーヌは巨人を嫌ってその場を去る。カドミュスは、エ
ルミオーヌを救うため、軍神マルス *Mars* の龍を倒そうと決心する。

〔第二幕〕(宮殿)エルミオーヌはカドミュスを引き止めるが、彼の決心は変わらない。カドミュ
スが立ち去った後、嘆き悲しむエルミオーヌの前に「愛」の神が雲に乗って登場、彼女の心を慰め
る。

〔第三幕〕(砂漠と洞窟)カドミュスは龍を退治する。マルスが馬車に乗って登場、司祭たちの祈
りを止め、復讐のためにカドミュスに更に試練を課す。

〔第四幕〕(戦場)「愛」の神が雲に乗って登場、カドミュスの手助けをする。カドミュスが蒔い
た龍の歯から戦士たちが生えてくる。カドミュスが彼らの中に「愛」の神がくれた手榴弾のような
ものを投げ込むと、爆発し、恐怖を覚えた戦士たちは互いに戦い殺しあう。生き残った者は、カド
ミュスに降伏する。次に、巨人たちがカドミュスに襲いかかる。女神パラス *Pallas* がミズクに乗っ
て登場。楯をかざすと、巨人たちは一瞬にして石像に変わる。カドミュスとエルミオーヌが再会を
喜んでいると、雲がエルミオーヌを包んで飛び去る。孔雀に乗った女神ジュノン *Junon* の仕業である。
虹の上に攫われたエルミオーヌは助けを呼ぶ。

〔第五幕〕(女神パラスがカドミュスとエルミオーヌの結婚のために準備させた宮殿)カドミュス

は、エルミオーヌを奪われて嘆いている。雲に乗った女神パラスが彼を慰める。天が開き、神々がエルミオーヌを伴って登場。彼女は「結婚」の女神の片側の玉座に座る、「結婚」の女神はカドミユスに席を与える。大神ジュピテル Jupiter は二人を祝福し、女神ジュノンもこの結婚を承認する。

(橋本)

Lully et Quinault : *Alceste*

ジャンル 音楽悲劇(Tragédie lyrique)、プロローグ付五幕
初演 1674年1月19日 国立音楽アカデミー (Spire Pitou “The Paris Opéra”)
出版 1674年
出典 エウリピデス『アクケスティス』

キノーの二番目の音楽悲劇。音楽悲劇の中でも、視覚的な興奮と激しさで際立つ「もっともバロック的な悲劇」(Girdlestone)である。ヴォルテールは、『アルミード』とともにキノーの代表作に挙げている。1673年モリエール死去の機に乗じて、リュリはモリエール座から劇場を奪い、パレ・ロワイヤル座に移転した。以後、パリ市中での上演はこの劇場で行う。その公演の第一作がこのオペラである。この作品は前作以上の成功を取めたが、エウリピデスの脚色の仕方に、学者たちから批判の声があがった。ペローは『オペラの批判』で擁護したが、ラシーヌは『イフィジェニー』序文で厳しく批判し、新旧論争が起こった。1673年にヴェルサイユ宮殿の庭園の水路が完成、ルイ14世は船遊びを楽しんでいた。7月の宮廷の祝祭でも上演され、水路では祝祭の照明が行われた。エウリピデスの作品にない第一幕の祝宴の場面は、国王の当時の好みを反映し、観客は舞台上にヴェルサイユの舟遊びの情景を見ていたと考えられる。リュリは、前作同様にレシタテ・ヴォの技法を用いているが、特に二挺のヴァオリンが伴奏する第一幕五場での二短調のリコモッドの朗唱が優れている。またこのオペラで最も興味深い曲の一つは、第四幕一場のカロンの歌である。なお、Mlle Beaucreuxがセフィーズ役でデビューした。宮廷では、1677、1678、1703年に上演され、パリ市中では1678、1682、1706、1707年に再演された。

〔プロローグ〕(副題「喜びの回帰」)(テュイルリー宮殿と庭園)セーヌ川の水の精は英雄を待ち焦がれている。「栄光」が登場し、間もなく英雄が現れると告げる。他の水の精と森の神々が現れ、歌い踊る。一同は、栄光と喜びの一致は愛のためであると合唱する。

〔第一幕〕(テッサリアのヨルコスの町)テッサリアの王アドメット Admete とヨルコスの王女アルセスト Alceste の結婚式の準備中、アルシッド Alcide も招待されている。祝宴が始まり、海に場所が移る。アルセストに恋心を抱いていたスキロスの王リコモッドは、アルセストを自分の船に導く。アドメットとアルシッドが続いて乗船しようとした時、女神テティス Thetis が海から現れて、嵐を起こしてアルシッドを殺そうとする。この騒ぎに乗じて、リコモッドはアルセストを自分の船で連れ去る。

〔第二幕〕(スキロスの市)アルセストを連れ去ったリコメッドは、この市に立て籠もる。アドメットとアルシッドが、アルセスト救出に追いかけて来る。城壁をはさんで戦闘。城壁が壊され、アルシッドを先頭に城に侵入、アルセストを奪い返す。アルシッドは、自分の仕事は終わったとその場を去る。この戦闘中にアドメットが瀕死の重傷を負う。太陽神アポロン Apollon が現れ、身代わりに死ぬものがあれば、アドメットの命は救われると告げる。

〔第三幕〕(身代わりに死ぬ者を讃える記念碑の前)アルセストが身代わりに死に、アドメットは甦る。記念碑の祭壇が開き、胸を刺すアルセストの像が現れる。アドメットは後を追おうとする。そこへ異変に気付いたアルシッドが戻ってくる。アルシッドは、アルセストの死を知って、冥界に彼女を取戻しに行くと言う。アドメットは、アルセストを甦らせてくれれば、彼女をアルシッドに譲ると約束する。雲の上に女神ディアヌ Diane が登場、アルシッドに助力を申出、メルキュール Mercure に冥界への先導をさせる。

〔第四幕〕(冥界のアクロンの川)アルシッドは無理やり渡守りのカロン Charon に船を出させる。(舞台はプリュトン Pluton の宮殿)冥界の王プリュトン Pluton と妃プロゼルピーヌ Proserpine は、アルセストを歓迎する。そこへ、アルシッドがやって来たと急を告げる報せ。プリュトンは、猛犬の鎖を解いて防戦するように命じる。アルシッドには猛犬もかなわない。プロゼルピーヌの取りなしもあって、プリュトンはアルセストを地上に返す。

〔第五幕〕(冥界から帰還するアルシッドを迎える凱旋門)人々はアルシッドの帰還を喜ぶ。アドメットは、アルセストをアルシッドに譲ったことを後悔している。アルシッドはそれに気が付き、アルセストをアドメットに返す。アポロンは二人の愛を讃え、一同はアルシッドを誉め讃える。

(橋本)

Lully et Quinault : *Thésée*

ジャンル 音楽悲劇(Tragedie lyrique)、プロローグ付五幕
初演 1675年1月11日サン=ジェルマン・アン・レー
1675年4月 国立音楽アカデミー (Spire Pitou “The Paris Opéra”)
出版 1675年

キノーの三番目の音楽悲劇。このオペラは、リュリの作品の中で最も優れた作品というわけではないが、一世紀以上もレパートリーに残っていることが示すように最も人気のある作品の一つである。1674年はテュレンヌがアルザスに進駐し、フランシュ=コンテの再占領の年である。プロローグの場面には、国王の帰還と平和への願いがこめられている。前作への批判に答えるため、*Thésée*は前の二作よりも筋はより単一になり、より正則悲劇に近いものになっている。状況設定はラシーヌの悲劇を思わせる。メデがテゼを殺害するとエグレを脅迫する場面は、『ブリタニキユス』の状況に類似している。特に有名な曲は、第一幕四場の合唱、第二幕六場の二人の老人の二重唱、第二幕

九場のメデのレシタティーヴォ、第三幕六場のメデの呪文である。初演では Médée 役は、Saint-Christophe が演じた。衣装は、Jessay に代わって、Bérain が 1677 年のこの作品の再演から彼が死ぬまで担当した。再演は、宮廷では 1677 年に、パリ市中では 1679 年から 1782 年の間に 12 回以上行われた。

〔プロローグ〕（ヴェルサイユの庭園と宮殿の正面）「愛」「優雅」「喜び」「戯れ」は、国王が自分たちに無関心なことを嘆き、この地を立ち去ろうとする。軍神マルス、続いてバッカスとセレスが登場し、引き止め説得する。一同は納得して歌い踊り、オペラの上演のために退場する。

〔第一幕〕（ミネルヴァの神殿）舞台裏からアテネ攻防の戦闘の叫び。王女エグレ Eglé は、女神ミネルヴァ Minerve に救いを求める。テゼ Thésée は、エグレとアテネのために戦っている。エグレは、密かにテゼを愛している。反乱が鎮圧されたという報せが届く。国王は、メデ Médée を捨てて、エグレと結婚すると言う。エグレが渋っても、国王の結婚の意思は変わらない。

〔第二幕〕（宮殿）メデは国王に捨てられたことを悲しむ。国王は、自分の国を守ってくれたメデに感謝し、間もなく当地にやって来る自分の息子との結婚を勧める。そこへ、民衆が王位の継承者としてテゼを選ぼうとしているという報せがはいる。国王は驚いて、止めに行く。テゼが一同を抑え、騒ぎを解散させる。テゼは、褒美としてエグレとの結婚の許しを国王に求めようとする。メデは、テゼに国王が恋仇であることを告げる。嫉妬に狂ったメデは、恋仇のエグレへの復讐を誓う。

〔第三幕〕（場所の指示なし）エグレに、すぐに王妃となるようにと言う国王の命令が伝えられる。メデが登場、恋の怒りをエグレにぶつける。エグレは、国王と結婚する意志がないと、メデに告げる。メデは、自分もテゼを愛している、エグレの恋仇だと宣言する。メデの魔法の力で、場面は恐ろしい怪物に満ちた荒野に変わる。一同は、この変化に驚き、恐れる。メデは、冥界の住人たちに恋仇への復讐を命じる。エグレは、驚いて逃げるが、付きまとわれる。

〔第四幕〕（場所の指示なし）メデは、エグレが国王と結婚しなければテゼを殺すと脅迫する。エグレは、メデの命令にやむなく同意する。メデの魔法の力で、眠ったままのテゼが亡霊に導かれて登場。舞台は魔法の島に変わる。メデが、魔法の杖でテゼに触れると、テゼが目覚める。エグレはテゼに見向きもしない。メデは、彼女が王位に目が眩んで裏切ったのだと告げて去る。エグレはテゼに、国王と結婚すると告げる。テゼは、自分が国王の息子であるという秘密を打ち明ける。エグレは、メデに国王と結婚するように脅迫されたのだと真相を告げる。メデ、突然雲から登場。エグレとテゼは、互いに相手を庇い合う。メデは、テゼへの愛のために二人を許す。メデの命令で魔法の島の住人たちが、二人の恋人のために余興を始める。

〔第五幕〕（メデの魔法でできた宮殿）メデは、テゼを殺して復讐しようという意思を失っていない。メデは国王に、テゼを毒入りの杯で殺すように勧める。国王は、一同を前にテゼを後継者と認め、杯をテゼに手渡す。テゼは杯を受取り、剣を抜き誓いを立てる。国王は、その剣を見て、テゼが自分の息子であることに気付く。国王は、あわてて杯を奪う。メデは退散する。国王は、テゼとエグレの結婚を喜ぶ。メデが空を飛ぶ龍の牽く車に乗って登場。宮殿は消え、亡霊がアテネの人々を追い掛ける。一同は、神に救いを求める。ミネルヴァ登場、その力で壮麗な宮殿が現れる。ミネ

ルヴァと神々は、一同を祝福する。

(橋本)

Lully et Quinault : *Atys*

ジャンル 音楽悲劇(Tragédie lyrique)、プロローグ付五幕
初演 1675年8月 国立音楽アカデミー
1676年1月10日 サン=ジェルマン・アン・レー (Spire Pitou “The Paris Opéra”)
出版 1676年
出典 オヴィディウス『変身物語』巻10

キノーの四番目の音楽悲劇で、リュリのオペラの代表作の一つである。ルイ14世が特に気に入ったため「国王のオペラ」とよばれ、1677年、1678年、1682年にサン=ジェルマン・アン・レーで再演されている。1682年1月7日の上演の時は、貴族たちも出演者にまじってバレエを踊った。Atysは、愛が悲劇的な結果を生むキノーの唯一の悲劇である。Atysは、完璧な構成とともに、オペラの要求を完全に満たしている。この作品で、筋は単一になり、劇的構成と感情の真実さにおいて一つの頂点を極めた。オペラは悲劇と拮抗しうるものとなったと言えるほどである。音楽的には、第一幕四場のサンガリッドの曲、第一幕八場のシベールの降臨の曲が優れている。シベールの役は Saint-Christophe、サンガリッドは Aubry、アティスは Cledière、プロローグのメルポメヌは Beaumavielle と Beaucreux が演じた。パリ市中での再演は、1677、1678、1689、1690、1699、1700、1709、1738、1739年に行われた。Jélyotteは、1738年の上演にモルフェ役でデビューした。

〔プロローグ〕(時の神の宮殿)時の神が12人の昼の時間と12人の夜の時間とともに登場、過去の英雄の栄光が色褪せる英雄の出現を告げる。悲劇の神メルポメヌが、一群のギリシャの英雄を連れて登場。メルポメヌは、これから『アティス』Atysの上演を告げる。英雄たちは互いに戦いを始める。イリスが、メルポメヌとフロールを和解させる。二人は協力して新しい英雄のために上演を準備する。

〔第一幕〕(女神シベール Cybèleに捧げられた山)シベールの祭りの日の夜明け。国王の寵臣アティスは、シベールが天から下りてくるのを待っている。水の精サンガリッド Sangaride もシベールを迎えるために登場。サンガリッドはフィリジーの王セルニュス Celenusと今日結婚することになっているが、密かにアティスを愛している。アティスとサンガリッドは互いに愛を告白する。シベールの降臨。

〔第二幕〕(シベールの神殿)人々は、シベールが祭司を指名するのを待っている。指名された祭司は絶対の権力を握ることになる。王のセルニュスは自分以外の人物が選ばれることを恐れている。また、婚約者のサンガリッドに恋人がいるのではないかと疑っている。シベールはアティスを祭司に選ぶ。セルニュスはアティスなら異存はない。一同はシベールを誉め讃え、アティスを選ばれたことを喜ぶ。

〔第三幕〕(シベールの大祭司の宮殿)サンガリッドがアティス以外の人との結婚を拒んでいるとアティスに報せがある。その時、シベールが自分の愛を伝えるためにアティスを眠りに落とす。場面はケシと小川に囲まれた洞窟に変わる。「心地好い夢」が現れ、踊りながらシベールの愛を伝える。「不吉な夢」が、シベールの愛を裏切ったときの復讐の恐ろしさを伝える。アティスが驚いて目を覚ますと元の宮殿に戻る。シベールは、夢は自分の命令で自分の心を伝えたものであると告げる。そこへサンガリッドがやって来て、シベールの膝にとりすがる。シベールは、二人の仲に疑いの目を向ける。シベールは、アティスの望みをかなえてやるように風の神ゼフィールに伝える。

〔第四幕〕(サンガールの川の宮殿)サンガリッドは、一日の中にアティスがシベールに心移したことを嘆く。セルニュスは結婚式の用意ができたことを伝える。サンガリッドはアティスにセルニュスと結婚すると語る。二人は互いに相手の心変わりを非難する。シベールに本心を告白しに行こうとするアティスと見て、サンガリッドは彼の気持を知る。結婚を喜ぶ人々を前に、アティスは、この結婚の中止を宣言する。ゼフィールがサンガリッドとアティスを運び去る。

〔第五幕〕(心地好い庭園)シベールは、アティスとサンガリッドへの復讐を宣言する。セルニュスとシベールは二人を呼び止める。シベールの命令で、アレクトン Alecton が松明を持って、地獄から出てくる。アレクトンがアティスの頭上に松明を振りかざすと、アティスは錯乱し、サンガリッドを怪物と取り違え、ナイフを持ってサンガリッドを追い掛ける。サンガリッドは舞台袖に逃げる。セルニュスが後を追って止めようとするが、アティスはサンガリッドを殺す。シベールがアティスに触れると、彼は正気に戻り、自分がサンガリッドを殺したことに気付く。アティスはシベールを呪い、胸を刺して自殺する。シベールはアティスを松の木に変える。(橋本)

作品梗概集索引

Bidar : <i>Hippolyte</i>	III 79
Boyer : <i>Ulysse dans l'île de Circé</i>	III 95
Corneille, Thomas	
: <i>Ariane</i>	III 89
: <i>Bérénice</i>	IV 83
: <i>Camma</i>	III 88
: <i>Circé</i>	III 98
: <i>Darius</i>	IV 85
: <i>La Mort d'Achille</i>	III 91
: <i>La Mort de l'empereur Commode</i>	83
: <i>Le Comte d'Essex</i>	III 92
: <i>Persée et Démétrius</i>	85

: <i>Timocrate</i>	IV 81
Corneille, Pierre : <i>Andromède</i>	III 96
Garnier : <i>Hippolyte</i>	III 74
Gilbert : <i>Hypolite</i>	III 78
La Pinelière : <i>Hippolyte</i>	III 76
L'Hermite de Vauzelle, Jean Batiste : <i>La chute de Phaéton</i>	III 94
Lully et Quinault	
: <i>Alceste</i>	88
: <i>Atys</i>	91
: <i>Cadmus et Hermione</i>	86
: <i>Thésée</i>	89
Mairet : <i>Chryséide et Arimand</i>	IV 63
: <i>La Silvanire</i>	IV 66
: <i>La Sylvie</i>	IV 65
: <i>Les Galanteries du duc d'Ossonne</i>	IV 68
Pradon : <i>Phèdre et Hippolyte</i>	III 81
Rotrou : <i>Antigone</i>	80
: <i>Cléagénor et Doristée</i>	IV 72
: <i>Crisante</i>	78
: <i>Iphigénie</i>	81
: <i>La Bague de l'Oubli</i>	III 83
: <i>La Belle Alphrède</i>	III 85
: <i>Laure Persécutée</i>	III 86
: <i>Les Occasions perdues</i>	IV 70
Tristan L'Hermite	
: <i>La Marianne</i>	IV 74
: <i>La Mort de Chrispe</i>	IV 78
: <i>La Mort de Sénèque</i>	IV 77
: <i>Osman</i>	IV 80
: <i>Panthée</i>	IV 75

* ローマ数字 III、IV は掲載した号数を示す。